

種唐菓、内藏寮調之、納言之下史已上座唐菓亦同。

〔大江俊矩記〕文化十四年正月七日辛亥、白馬節會略○中 次供晴御膳二盤略○註 一盤 四種 酢酒、鹽

醬、第二盤 唐菓子 粉熟 同汁 索餅 餛飩 桂心略○中 次供腋御膳一盤略○註 此盤第三盤

也、餛飩子 黏臍 饅饅 團喜

餅腩

〔倭名類聚抄十六〕餅腩 楊氏漢語抄云、裏餅中納煮合鵝鴨等子并雜菜而方截、一名餅腩玉篇、腩、達、濫反、肴也

〔箋注倭名類聚抄四〕餅腩按避暑錄話唐御膳以紅綾餅腩爲重、唐撫言、宣宗賜韋渙孫宏銀餅腩、食之

甚美皆乳酪膏腴之所爲、杜陽雜編載同昌公主之葬云、上賜酒一百斛餅腩三十駱駝、各徑濶二尺、

飼役夫也、六書故今人以薄餅卷肉切而薦之曰燂、

〔伊呂波字類抄飲食部〕餅腩へイタン裏餅中納煮合鵝鴨等子并雜菜也

〔西宮記八月〕定考

上卿已下著朝所略○中 三獻之後居粉熟飯近年二獻居粉熟飯、三獻居飯、○中略數巡後居餅腩、

〔侍中群要六〕餅饅事

家列見定考後朝官厨家獻餅饅入折櫃居是殿上料也、依爲後懸歟、專非供御料、而不知案内之藏人獻

大盤所、或奏事由云々、而今多宛供御、此事如何、可隨末代之例歟、

〔枕草子七〕頭辨藤原の御もとよりとて、そのもづかさ、ゑなどやうなる物をしろきしきしにつ

つみて、梅の花のいみじく咲たるにつけて、もてきたる、ゑにやあらんと、急ぎ取いれて見れば、へ

いだんといふ物を二つならべてつゝ、みたる成けり、そへたるたて文に、けもんのやうにかきて、

進上へいだん一つ、み、例によりて進上如件、少納言殿にとて、月日かきて、みまなのなりゆき、下

略

〔兵範記〕保元三年二月十一日壬寅、依式日有列見事、已刻參官廳○中 此間權辨下官○平 以下向朝